



町医者をつぶさき

第5回

医療法人緑星会どうたれ内科診療所院長／千葉大学医学部臨床教授

堂垂 伸治

私的教育論前編—教育の荒廃を嘆く

<はじめに>

12年2月20日の日経新聞の「教育」欄に、国立大財務センター教授・金子元久氏の興味深い論文が掲載されていた。「勉強しない学力中位層」と題され、「約6割の高校生が家ではほとんど勉強しない」、「自ら学ぶ習慣 身につかず」と指摘している。つまり「(大学)入学試験が選抜的な大学を目指す層」の「上3分の1」しか勉強しておらず、残り3分の2は全く勉強していないそうである。金子氏はこの現状に対し「基礎能力検定試験」を行い学力低下を防ぐべきだと提案している。

私たち「団塊の世代」の頃と異なり、現在の「大学入試」は推薦入学やAO入試、単願・専願などがあり、殆ど大学全入時代と化している。大学側は経営第1で学力を棚上げし新入生集めに奔走し、高校生は「金さえ払えばとりあえず大学生になれる」ようである。さらに12年2月25日の読売新聞では1面で「大学生 数学危機」、「24%が『平均』分からな

い」と大学生の学力低下を報道している。以前も「分数ができない大学生」などと話題になったが、この惨状はどうして起こったのだろうか？現在の教育体制は恐ろしいほど劣化・崩壊しているのではないか？

<最近の授業風景は……>

高等教育を嘆く前に、その手前の“公立小中学校”でも一部を除き「勉強しない子どもたち」が極めて多くなっているのではないか。夏休みや冬休みにはスーパーやコンビニで1日中子どもたちが遊んでいる。進学塾や習い事でも行っていない限り、休日は殆ど遊んでいるようだ。こういう外で遊んでいる方はまだ良い方かもしれない。自宅にこもってゲーム三昧の子供たちやAKBにのめり込んでいる子どもも多数いるのだろう。

つまり、「小さな頃から勉強の習慣が身につけていない」ようで事態はより深刻で根深い。小中学校で習慣がついていないものを大学入試の時に強要しても明ら

かに手遅れである。極論すれば（少なくとも首都圏の）公立小中学校は、子どもたちに学力のみならず「勉強の習慣」そのものを身につけさせていないと推測される。

私も公立小学校の授業参観を経験したことがある。算数の授業だったが分配法則の説明をしていた。最初に○や△や□を使い抽象的に説明し、その後に具体的な問題を解くという授業をしていた。「これは私たちが大学の教養学部で線形代数の講義の時と同じだ」と感じた。それは、一方的に定義や定理だけが板書され具体的な例題や問題演習がない授業だった。それなりに数学に自信があった同級生の多くは戸惑い理解できず興味を失った。これと同質の授業を先生が小学生に行っていると感じた。

小学生などへの教育では、「子どもたちがどうしたら興味を持てるのか」、「理解しやすいか」、「難しい事柄も簡単だと感じるにはどうすればいいか」が基本的な視点のはずだ。他にも明らかに予習が不十分な先生が、生徒を見ずに教科書片手に板書している光景にも出会った。先生自身が予習も不十分で工夫もなく授業していれば、生徒たちも勉強への意欲を失うのは当然だろう。

<「ゆとり教育」は教育バブル版>

ここで「ゆとり教育」について言及したい。これは「知識重視型の教育方針を詰め込み教育であるとして学習時間と内

容を減らし、経験重視型の教育方針をもって、ゆとりある学校をめざした教育」^[1]である。歴史をみると70年代から文部省と日教組が相携えて進めてきたものである。2002年から本格的に稼働し、「①学習内容及び授業時数の削減、②完全学校週5日制の実施、③総合的な学習の時間の新設、④絶対評価の導入」が行われた。

これは「校内暴力、いじめ、登校拒否、落ちこぼれ」を減らす事が目的とされた。しかし、結果は周知のように、ただ「学力低下」と「自分勝手な生徒」を作っただけだった。「ゆとり教育」の下、子どもたちはゲームに熱中し親も注意しない、いじめは陰湿になり相変わらず子どもたちの自殺がある。少年たちはホームレスなど「明らかに弱い人々」に暴行するようになった。

この政策を説いた寺脇研元文部官僚が、受験校・全寮制の鹿児島ラ・サール高校、東大法学部出身だったという点は大変皮肉というものだ。大体「ゆとりの中から思考力が生まれる」などとは、さすがに「優等生」の発想だ。私など難しい課題を解く際の汲々とした苦闘から「思考力」や「学力」を何とか育てた経験しかない。「ゆとり教育」を説いた連中は総括もしていないし、責任もとらずヌクヌクとしている。この国は、いつも「評価や総括」を曖昧にし、過去を忘れ責任をとらず、なし崩し的に次の方策に走っている。

＜「3丁目の夕日」学校版＞

こういう状況を見ると、私たちが教わった頃とどうしても比較したくなる。

一言でいえば、昔の先生方はとにかく熱心に良く教えてくれた。当時（の地方で）は、塾や予備校は殆どなかった。参考書なども目にするのは少なく「学校からのプリント」程度だった。しかし公立学校の先生方の多くが情熱を持って「参考書以上の内容」を教えてくれた。

私は富山の農村～田舎で幼少期を過ごし、今ではすでに廃校になった小学校に通っていた。そういう田舎小学校でも、担任の先生が宿直の夜に意欲を持つ生徒数人を集め、勉強など様々の事柄を教えてくれた。子どもたちの生活はもちろん牧歌的だった。校庭で集団ゲームをしたり刈り終わった田んぼで草野球を暗くなるまでやったり、川でヤツメウナギやコイやフナをつかまえた。夏休みの宿題は植物採集や昆虫採集が定番だった。

その後私は仙台市に転居し、たまたま近所のやはり教育熱心な公立中学に入った^[2]。そこには、毎回自分で鉄筆・ガリ版でプリントを作り配布してくれた先生がいた。丁寧に黒板全体に板書して教えてくれたり、放課後に英習字を教えてくれた先生もいた。冬には外が真っ暗になった中、薄暗い蛍光灯の下で全員に「補習授業」をしてくれた。多分、先生方は手弁当で教えていたと思う。一面「差別・選別教育」だったが、今の「平等」教育より余程マシだった。

確かに「差別・選別教育、受験戦争」はあった。中間テスト・期末テスト・実力テストが交互に1月毎にあり、その都度全9科目と総合点数の成績一覧表が配布された。ガリ版刷りで各科目70点以上の全員の氏名が冊子として渡された。今から考えると「とんでもない」と思うほどの、点数による序列づけが行われていた。電卓もコピー機もない時代にこういう冊子を作った労力に感心するくらいだ。7・3体制^[3]や「15歳の春を泣かせない」と言われたような受験戦争があったが、活気に満ちた学校生活があった。

高校でも一いわゆる受験高校だった事もあるが―「お前たちはバカだ」と言われ続けて、勉強の尻を叩かれた。しかし、各先生方の専門知識は極めて豊富で人間的にも魅力を感じる方が多かった。歴史の先生が口頭で話した内容を漏らさずノートにとると、その全てが正確な内容で「どうして全部覚えているのだろう」と驚いた。各先生方は自らの専門科目では直ちに解答できる能力を持っていた。したがって、どんなに厳しい先生でもあるいは「性格の悪い先生」でも、生徒としては一目置かざるを得ない存在だった。愛称（あだ名）がついていた先生方も多かった。少なくとも先生方は、「青は藍より出でて藍より青し」という心がけで生徒育成を行っていたように思う。

この頃は、1クラスはいつも50人以上で正に「イモの子を洗うような学校生活」だった。しかし、何よりも「たくま

しく生き抜く力」を育ててくれたように思う。この「団塊の世代」は、大雑把に言えばその後「勤勉・実直・我慢強く真面目な仕事ぶり」を発揮し、高度経済成長を支えたと言えよう。戦後の教育体制は、日本の「信頼できる秩序や技術、誠実な仕事や製品づくり」など「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の基盤を担ったと思う。ただし、創造力や新規開発力、個性の発揮などでは劣っていたかもしれないが。

<昔の公教育の原点は……>

振り返ると、私たちの時代の公立学校はよくも悪しくも活気があり燃えていた。多分この原点は「日本を教育立国にする」、「戦後の復興には教育が大切だ」、「子どもたちをしっかりと育てる事が、敗戦国・資源小国の日本には重要だ」という気概に満ちていたためではなかったろうか。当時の先生方は、これを直観的に感じとり、私たちに熱心にぶつかって来られたのではないか？社会の雰囲気も、「がんばらないと食べてゆけない」、「一所懸命に勉強したり運動したり働いたりすると報われる」、「今頑張れば将来豊かになる」という暗黙の了解が存在したように思う。

そして何よりもこういう教育体制を「安価な公教育」が保証してくれた。公立高校の授業料は月800円、国立大学の授業料も年間1万2千円だった。少なくとも家庭は貧乏でも、努力すれば高等教育

を受けられ最高学府にも入学できた。「教育を受ける権利」は正に「平等」だった。生徒たちも「ハングリー精神」があり「夢や希望（ときには野望）」を抱いていた。

<現行の教育体制について>

教育はそもそも子どもたちが大きくなって社会に出てやってゆける人材を育てることだ。換言すれば、社会の中で自分の居場所を作る力を身に付けさせることだ。これからより複雑で多様になる国際社会で生き抜いてゆける精神や技術や方策を与える事だ。現在の公教育でそれは為されているだろうか？

少なくとも大都市圏で教育の重要性を意識している家庭は、公教育に余り期待していない。大都市圏で「一定水準以上の教育」を子どもに望むなら、いわゆる「私立中学受験」のレールに乗る事が必要である。実際、子育てに敏感な（中流以上の）中国や韓国籍の親は、公立中学は捨てて私立に子どもを通わせている。競争の激しい自国に戻った時に、子どもが落ちこぼれにならないためだ。

終身雇用で安定した公立学校の先生より、私学の方が余程熱心に教育してくれる。この違いは、多分「私学の先生には評価と（有形無形の）報酬が伴う」が、「公立の先生には評価も報いもない」からであろう。ここらは医療での公立病院と私立病院や開業医の違いと同様と言える。

しかし周知の通り、私立に通わせるには相当額の授業料が必要だし、その前の

進学塾の費用もこれまた相当な金額である。率直に言って、そのレールに乗るには親の年収に依存している^[4]。昔は子どもに関してだけだった「差別・選別教育」は、今は「親や家庭をまきこんだ差別体制」になっている。また以前は、高校入試、大学入試と分岐点は二つあり「敗者復活」が可能だったが、今の「分かれ道」はずっと手前の中学入試になっている。

実際、今の大学や中高一貫校の（入学費を含む）負担額は年間100万円以上である。日本の平均的家庭の年収は450～550万円と言われており、これでは、2人以上の子供を育て「一定水準以上の教育を受けさせる」ことは不可能という事になる。こんなに高い学費では、今の学生たちは通常の「政治活動」も不可能で、まして「全国学園闘争」など二度と起こり得ないというものだ。こういう教育の現実と子どもの養育費も勘案すると、「子どもを作らない」、「子育ては不採算投資」とされ、少子化の原因・元凶とまで考えられる。若い夫婦は「子どもを作るとお金がかかり、今の生活レベルを保てない。だから子どもを作らない」と感じており、これは「公然たる事実」である。昔は一失礼な言い方で申しわけないが私の友人がそうだった—「牛乳屋の息子さん」が東大に入学できた。しかし現代の教育体制は「格差社会の再生産構造」となり^[5]、「カエルの子はカエル」、「カモメはカモメ」でしかなく「夢を持ってない社会」「負け組から這い上がれない社会」となって

いる。

＜「中高一貫教育」の問題＞

今や「中高一貫校」が圧倒的な人気となっている。6年間の内容を5年で教え最後の1年は入試対策が出来るのだから、大学受験では明らかに優位である（私たちは高校3年間の内容を2年で教えられたのもっと厳しかったが）。しかし、私はこの「エリート生産工場」には特に人格形成等、以下の5点で大いに疑問を抱いている。

- ①まず、多感なこの年代が「（特に「偏差値」で輪切りにされた尺度で）極めて均質な集団」で過ごす点である。知的レベルの高い層で過ごすことは確かに刺激的だろうし、大学入試という点では合理的だと思う。しかし、当然ながら社会には極めて多様な人々がいる。前述したように、「昔の公立中学」はそうした人々との出会いやその中での葛藤が経験できた。そういう中で「ひ弱さ」や「もろさ」も克服でき、「したたかさ」や「闘争心」を鍛える機会があった。人格形成の重要な時期に（特に男女別学の）均質な層だけで集団生活をおくり「均質な価値観が醸成されること」のデメリットがあるはずで検証すべきだと考える。
- ②こういう「それなりにエリート意識を持った均質な集団」で過ごすと特に「社会的弱者に思いやりのない感性の乏しい人格形成」がなされているのではな

いか？現実社会は「言葉や理論だけでは割り切れない感情や情念」が作用するところがある。「理屈では割り切れない事柄がたくさんある」という視点が身に付くのだろうか？

たとえば昨今「官僚批判」の国民感情が極めて大きい。これなどは国民が「言葉で巧妙にいくるめる」彼らに、直観的に「虚構」や「反感・敵意」を感じているからであろう。簡潔に言えば、「頭がいい連中」を信じて、国家や社会の中核の全てを委ねると国民は不幸になりかねない。(私は、最近の若い医師には「いったい何を考えているのだろう」とか「冷たい医師・感性が乏しい医師が多くなった」と感じているのだが、この「中高一貫教育」と関係があるのではないだろうか？)

- ③「中高一貫校」合格者は、この年代で一定の「達成感・成就感」を得る。私たちは高校という年齢でそういう経験をした場合もあるが、それが3年早い。家庭や周囲の環境もそれを許すだろう。当然ながら人生は長い。大学入試後この達成感で「5月病」があったが、中学入学でそれに近い経験をするものもいるだろう。卑俗な言い方をすれば「大学までの人物」ならぬ「中学までの人物」も排出しているのではないか。
- ④逆に当然ながら「中学受験」で涙を飲んだ生徒のその後にも影響が出る。「敗北感・劣等感」を12歳で味わう事になる。(優秀な中高一貫校の下位層も

同様だが)以前の時代なら、全国に散在していた「お山の大将」、「鶏頭」として花を開いたかもしれない人材が、自らの潜在的な才能を自覚せずにそのまま埋もれてしまっているかもしれない。今の「富士山型」の受験体制では、こういう「野人的な人材」が育たないのではないだろうか。少なくとも“アインシュタイン”は生まれそうにない。

- ⑤公立中学では、「指導的・意欲的な生徒に相当する『上澄み』が居なくなり、学校全体に沈滞したムードがある」と聞いたことがある。つまり総体として現在の初等・中等教育体制は、重要な成長過程で「偏った集団生活」体制で、「ひ弱な人格形成」を行っているのではないだろうか。(全国に散在する「国立中高一貫校」にはさらに問題点を感じているが、紙数に制限がありここでは論述を差し控える)

<現行の中学校等の管理体制について>

私は仕事柄「校医」として学校生活をかいまみる機会もある。ある公立中学を担当したとき予防接種の時、体育館に生徒たちが集められた。その揃いのジャージ姿にまず驚いた。学校在住時は、この服装だそうである。洋服代は安つくかもしれないが、未だにこういう個性のない服装を着用していることに違和感を抱いた。次に、静かに整列するよう先生方が叱っていたのだが、その軍隊口調の言い方にも驚いた。「こんなに命令口調でな

く、もっと論(さと)すような言い方があるだろう」と感じた。

今の公立中学ではいわゆる「内申書＝調査書」^[6]がある。以前から私はこれには疑問を持っていた。教師は必ずしも「聖人君子」ではないし価値観も多様で絶対的な者ではないはずだ。全員に「中立・公正な判断能力」が備えられているわけでもない。中にはとんでもない教師もいるし、「エコひいき」が好きな人物もいるはずだ。逆に、生徒にも「この先生は生理的に好きになれない」とか「自分に合っていない」などの感じる子もいるはずだ。それなのに、どうして教師側に生徒の「生殺与奪の権限」がこれほどに与えられているのか。

昔は、少しはずれたり反抗したりした生徒でも、高校入試や大学入試で「一発逆転」して「自分をいじめた教師の鼻をあかす」ことができた^[7]。今は「内申書」という「正確な日常点・評価付け」で、生徒たちに「がんじがらめのランクづけ」が為されている。

この「内申書」というのは、「荒れた学校」を鎮めるためや担任が生徒管理を都合よくできる武器となったのではないか。極論すれば、「内申書」は当該中学でその「管理に従順だった」という証明書でしかない。これは「先生に従順なコビる生徒」を作り、生徒たちには「陰湿な管理抑圧体制」を強いているようなものだ。「部活」も単に「内申書の点数稼ぎの場」になっているのではないか。

私たちの時代は「直接的・局地的で単純な管理抑圧体制」だったが、今は「間接的・広範で巧妙かつ隠微な管理抑圧体制」と言えよう。先生方の意識には「育てる」より「管理する」という感覚の方が強くなっているのではないか。

またこの「管理体制」は、生徒たちが社会人になった後に、上意下達の指令に対しそれがたとえ間違っただけであっても一疑念を抱かずがむしやらに従う「イエスマン」作りに結びついているのではないか？ 今後より複雑化する時代で最も大切な「何事にも疑いをもって接する見方」や「批判的精神」を、押しつぶしているのではないか？ これからの社会では、もっともあってはならない人材養成を行っているのではないか？

内申書が使用されてから、もう半世紀になろうとしている。果たしてこの選抜方法が妥当なものかどうかを検討すべきである。少なくとも「内申点とその後の大学進学率」の相関関係が検証されてしるべきである。

＜「少人数教育」について＞

少子化で今の低学年の学校は、労せずして「少人数教育」が可能となった。しかし、「きめ細かな理想的な教育となっているのか」というと、実態は大きく異なる。私が参観した授業では、授業中にあっちこっちで勝手に発言したり、動きだしたりしている子がいても注意もしなかった。授業は落ち着きが無く散漫なも

のだった。理解の程度がバラバラなのだから、教師が授業中に個別に回って説明してもいいのに、そういう姿も無かった。そもそも、教育の良し悪しは「先生の魅力」や教師の指導力・統率力、あるいは「面白い授業かどうか、役に立つわかりやすい授業かどうか」等の要因の方が影響が大きいだろう。少人数教育でも「わからない授業」や「うっとうしい授業」は存在するし、生徒間の人間関係も一端こじれたらむしろ修復が効かない陰湿なものになるだろう^[8]。少人数では確かに先生の負担は少なくなるだろう。しかしその分、先生の注ぐ力も減量され、結果的に子どもたちには「以前と同じかそれ以下」ということも十分あり得る^[9]。

この間を振り返ると、学校週5日制の実施、内申書の強化といい、「教える側」本位の論理が教育現場にまかり通ってきたのではないか。ここらは、公立病院が職員本位であって、患者本位でないシステムとなっている点と類似している。本来はそれぞれ「生徒（の成長と教育）本位」、「患者さん本位」であるはずだ。

<「詰め込み教育」は

本当にいけないのか？>

よく「知識を詰め込むような教育はダメだ」と言われる。特に、したり顔の教育評論家や「有識者」は「思考力を養わないといけない」などと言う。最近では「読解力や思考力・活用力が試されるPISAの成績が良くない」などとも言われ

る^[10]。しかし、初等・中等教育では果たしてそうだろうか？

私は、思考力というものは正確で豊富な知識を自分自身で積み重ねるうちに自然と育ってくるものだと考えている。15歳ごろまでに基本的な知識を身につけるべきで、それを基礎として始めて次のステップに上がれると思う。実際「暗記作業」や「学習習慣を身につける」というものは、この年代までが1番効果があるはずだ。ある時期には「単調な反復作業」も必要で、昔言われた「読み・書き・ソロバン」は真理をついている。基本的な計算力が身につけていないと、社会に出ても苦勞するはずだ^[11]。

想像力や思考力も最低限の知識が無いと上には進めない。「詰め込み教育はダメで問題解決能力が必要」などという言い方は、初心者に対して「食材を与えずに、料理法を一所懸命に教えるようなもの」だ。もっと単純に言えば「若いころに頭を鍛えておかないと、年をとってからは遅すぎる」。シカクいアタマも詰め込まないとマルくはならない。「鉄は熱いうちに打て」で、「少年老い易く学成り難し」である。大学生になってから高校以前の内容を補習で教えても「時すでに遅し」である。

重ねて言うが、今の初等・中等の公教育ではこういう基本的な知識を提供できていない。実際、社会などでは、日本の地理や歴史や政治等の基本的な知識が記載されていない。教科書と授業だけでは、

都道府県の場所も県庁名もわからない。算数も只々きれいなカラーの読み物集で問題数など数えるほどだ。ドリルも単純な計算だけで、それだけでは少し複雑な計算は解けない。何よりも生徒たちに知的好奇心を喚起しない。今回遅まきながら教科書の改訂（ページ数の増加）が行われたが、現状では「仏作って魂入れず」で「公教育への疑念」はぬぐいきれない。（以下、次回「私的教養論後編—教育の再生を願う」に続く）

<注釈および参考文献>

- [1] このセクションの引用はウィキペディア「ゆとり教育」による。
- [2] 私が通った仙台の中学は人口急増地帯にあった。1学年 1000 人 = 20 組以上、全校生徒数は 3000 人のマンモス中学だった。3 年の頃は、体育館を仕切ってそこにも 6 クラス作ったほどだった。東京タワーや日光への修学旅行などバス 20 台をつらねたわけでそれは壮観だった。クラブも盛んだったがとにかく手狭だった。卓球部では机やイスを教室の片隅にかたづけ、空き空間に 1 台しかない卓球台を組み立てた。それを 50 人くらいで分け合うという悲惨なものだった。いわゆる「ガリ勉」は評価されず、文武両道の生徒が一目置かれていた。多数の生徒が自発的に課外活動し、昼休みなど毎日のように校庭で何チームも入り交ざりサッカーボールを蹴飛ばしていた。もちろん課外活動が高校受験に反映されることはなかった。そんな時代だったから、校庭は夕方まで開放され、暗くなるまで校庭を駆け回っていた。夕刻時には校庭でバイクを乗り回している中学生もいた。生徒間では「番長」も居たし「ワル」も居た。「暴力事件」も日常茶飯事だったが、そんな場合も竹刀

をもって制裁していた技術家庭の先生には恐れを抱いていた。こういう先生により「校内秩序」は保たれていた。そうした日々から生徒たちは、「悪い事をやったら叱られる（殴られる）」、「いけないことを行ったら痛い目に会う」という教訓を身に付けた。多感な時代のこれらの経験を通して、勸善懲惡、自業自得、因果応報、「他人を傷つけない」、「仲間を裏切らない」、「親友を大切にすること」などの感覚を身につけたと言っても過言ではない。

家族ものっぴきならない事態となったら先生に相談していたかもしれないが、教育委員会に先生を「チクる」などは無かったのではないかと。少なくとも「暴力教師」などとマスコミに騒がれることは皆無だった。

- [3] 「職業科が 7 割、普通科が 3 割」と高校進学先の定員が決められていた体制。当時の経済界の人材需要に対応する体制だった。全国的には「6・4 体制」だったが、富山県では特に厳しく「7・3 体制」だった。
- [4] 「家庭の所得が低いほど子どもの学力は低下する？文科省も調査に乗り出す“学力格差”の知られざる実態」（ダイヤモンド・オンライン）
<http://diamond.jp/articles/-/17857>
この文献では「両親の所得と子どもの学力が正比例することは“公然の事実”、『勉強すれば、誰でも報われる』そんな常識が通用しなくなっている」と指摘している。また単なる経済的格差以外に「家庭内の文化的教養度」や「家庭内の教育力が関係している」と分析している。具体的には「低学力層に位置する子どもを持つ保護者に多く見られる行動」として、「テレビのワイドショーやバラエティ番組をよく見る」、「携帯電話でゲームをする」、「パチンコ・競馬・競輪に行く」、「カラオケに行く」とわかりやすい記載がされている。話題は飛ぶが、すでに「非正規社員の結婚率が低い」と言われており、「格差社会」は拡大再生産の構造となっている。
- [5] この点に関しては、東京では有名な学校群制度の導入に言及しておきたい。これは、1967 年から東都知事時代の小尾虎雄教育長により「9 科目の内申書と学力試験とを同等に評価」し、3・4 校

からなる各群の高校に割り振ったものである。周知の通り、この制度の導入により都立高校は凋落し代わりに私立・国立の中高一貫校が台頭した。結果は単なる「都立つぶし」の愚策でしかなかった。これを機に、「庶民が進学学校に行けた時代」から「金持ちしか進学学校に行けない時代」になった。この愚策の責任者たちも責任を全く問われなかった。

[6] 内申書の内訳は「約 50%がテストの点数で、残りの約 50%が授業態度」という、テストの点数を上げる事が出来なくても、『授業で積極的に挙手をする』『提出物をしっかりやって提出する』などは、今日からでもできる内申書アップ対策と言える」とまで解説されている。All About 高校受験 内申書・内申点対策 <http://allabout.co.jp/gm/gc/1294/2/>

[7] 私なんか小学校 6 年時、担任の先生に不満があり、サボタージュした覚えがある。言わせて頂けば、むしろ「反抗的な生徒たち」の方が、成長してから仕事を成就され社会に貢献している方が多いかもしれない。「立派な社会人の多くが、必ずしも学校では従順な優等生ではなかった」などは自明の理である。

[8] 最近、小中一貫教育が話題になっている。「試験的な試み」だったり「過疎地での対処」であればまだ理解できるが、こういう制度の方が合理的とする考えには全く納得できない。生徒たちは、最初にできた序列づけや先入観で 9 年間で過ごさざるを得ない。一度いじめに会ったら、9 年間地獄の日々を過ごすか、退校せざるを得ない。先生たちに「信任された生徒」は楽しい日々がおくれるだろうが、「目を付けられた生徒」は不幸な日々をおくることになる。節目の進学を機に、新たな学校で新たな関係性を作る事で、成長や転機を得られる方が多いはずである。実際、医師の新臨床研修制度では「医師がシャッフルされることが必要」という論理が説かれた。

[9] この原稿執筆中に、12 年 5 月 2 日の朝日新聞「教育」欄で、『2 年以上 30 人』で成績アップ」という記事が出た。京都府の小学生 8100 人余りで、「30 人以下の少人数学級を 2 年以上続けると成績

が上がる」と国立教育政策研究所（国研）が報告したという。しかしその内容をみると、以下の 3 点で「少人数教育に誘導したい記事」の感を抱く。①「30 人以上 2 年間の学級」と「30 人以下 2 年間の学級」にきれいに分けてその二つで比較対照したものではない、②国語だけで効果があるというもので、しかもその差が果たして有意なものか不明である、③（記事でも書かれているが）「全国学力調査で平均学級規模の小さな県が必ずしも上位ではない」との分析もある。

[10] PISA の調査は、OECD（経済協力開発機構）加盟国の 15 歳を対象とした 3 年に 1 度実施する「国際学習到達度調査」。実際の PISA の結果では、日本の子どもの学力は、第 1 回目の 2000 年調査では読解力 8 位、数学的応用力 1 位、科学的応用力 2 位と世界最高レベルだった。しかし「ゆとり教育」が浸透した 2006 年調査では、それぞれ 15 位、10 位、6 位と順位が大幅にダウンしてしまった。（ダイヤモンド・オンライン）<http://diamond.jp/articles/-/17857>

[11] 俗に「数学など社会に出て役に立たない」などと言われるが、私はこの見方は全く間違いだと考えている。数学を理解し問題を解くという学習過程は、論理的に思考する重要な訓練である。この点に関して、12 年 5 月 8 日の読売新聞の「論点」で、新井紀子氏が「大学生の論理力不足 数学入試多様化の弊害」という主張をされている。それによると、大学生の学力低下は「論理的に思考し、それを表現する力が弱い」とのこと。そして「大学入試で数学を受験しなかった層」が「論理的な説明」が弱く、「記述式の数学入試」を経験した層が論理力があつたという。新井氏は、「かつては大学に入学するには数学を克服する必要があつた」が、現在では（数学以外の）「受験科目だけに特化した勉強」だけで大学入学が可能になっており、これが論理力の低下を招いていると指摘されている。